

## 第6章 将来都市構造

## 1. 将来都市構造の基本方針

都市構造とは、都市の骨格的な自然要素や土地利用をベースとして、都市機能の配置の概念を簡単に表したものであり、将来都市構造とは、現在の都市構造に将来像の要素などを加味したものです。以下に、将来都市構造の基本方針を示します。

「うみ・まち・さと・やま」の個性と魅力を活かしながら、それぞれの繋がりを強めた築上町の将来都市構造を形成していきます。

特に、住民の生活水準に直接影響する合併以前の中心地として住民サービスを担ってきた椎田駅・築城駅周辺の市街地について、それぞれの地域特性を活かした再生を図るとともに連携を強め、一体性を高めることで築上町全体の地域活力を向上させていきます。

### 1.1 都市構造の現状と課題

本町は、北部の周防灘から南部の山間部まで、恵まれた自然環境に包まれた「うみ・まち・さと・やま」により構成されています。

東西方向に連携している広域交通網に沿って市街地が形成され、南北方向に繋がる道路や河川により、「まち」と周辺地区が結ばれています。

本町は、椎田町と築城町が合併して誕生しており、現状では旧町の生活単位が色濃く残っています。今後は、町民の生活利便性を高め、より便利で快適に生活できる環境を形成するために、全町を一体的に捉えたまちづくりが求められています。

### 1.2 都市構造の基本方針

#### 1.2.1 「うみ・まち・さと・やま」を活かした土地利用と都市機能を充実

「うみ」...海の恵みを楽しみ、既存施設等の有効活用を図った臨海部の交流拠点形成します。

「まち」...椎田駅周辺と築城駅周辺の個々の中心性を高め、本町の中心地としての機能強化を図ります。

「さと」...農地や集落地の環境を維持・向上させるほか、新しい産業の立地を誘導する拠点等を形成します。

「やま」...豊かな自然環境と既存施設等の有効活用を図った山間部の交流拠点形成します。

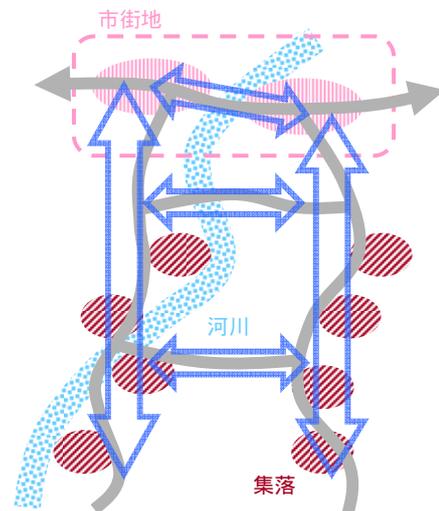
#### 1.2.2 「うみ・まち・さと・やま」のつながりの強化

##### ひとやものを繋ぐ軸の形成...

既存道路などを活用して、町全体をネットワークします。特に、南北方向の生活軸を充実することにより、本町の魅力の一体化を促進します。

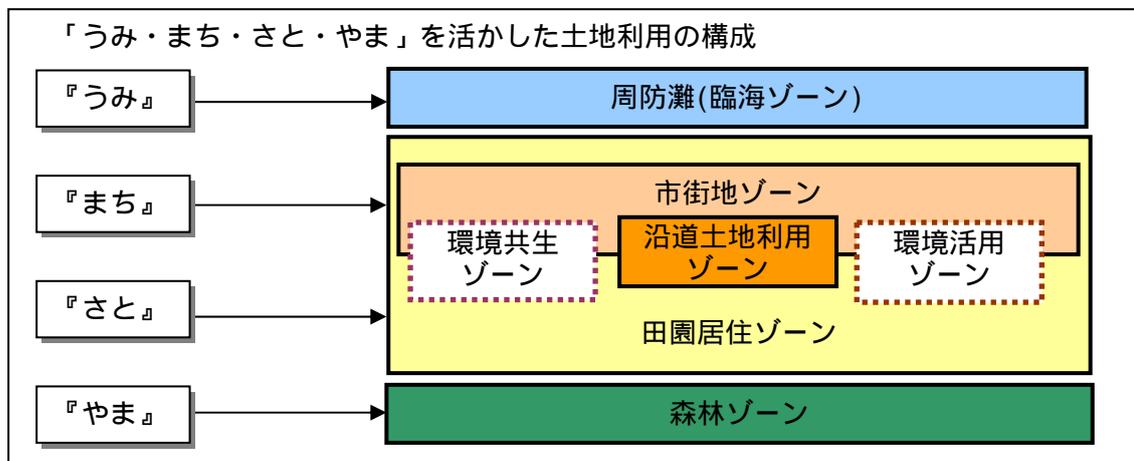
##### みずとみどりを繋ぐ軸の形成...

本町を流れる河川を活用して、山間部から臨海部へとつながる自然環境の繋がりを確保します。特に、城井川は本町の自然環境ネットワークのシンボルとして、積極的な保全・活用を図ります。



## 2. 土地利用構成

### 2.1 土地利用構成(ゾーン区分)の考え方



本町の「うみ・まち・さと・やま」の個性と魅力を活かすために、それぞれに対応した土地利用ゾーンを構成します。これにより、自然環境と都市環境の調和と利便性の高い市街地形成が両立したコンパクトな都市づくりを実現します。

### 2.2 ゾーン別将来土地利用

#### 2.2.1 周防灘(臨海ゾーン)

周防灘の持つ豊かな海洋資源の保全・活用を図ると共に、河川流域の環境対策も含めた自然環境の保全・向上に努めます。また、沿岸部の砂浜なども積極的に環境の維持・向上を図ります。

#### 2.2.2 市街地ゾーン

国道 10 号と主要地方道椎田勝山線に囲まれた区域は、本町の中心的な市街地を形成すべきゾーンと位置づけ、「市街地ゾーン」を形成します。

「市街地ゾーン」は、椎田駅前・築城駅前の市街地周辺について、本町の生活の中心地にふさわしい市街地環境の向上を図ります。

#### 2.2.3 田園居住ゾーン

市街地ゾーンの周辺は、農地と集落地の環境を維持・向上した「田園居住ゾーン」を設定します。

「田園居住ゾーン」は、農地や自然環境の保全を図りながら、市街地ゾーンへのアクセス性を高めるなどにより、集落地等の生活利便性を高めていきます。

#### 2.2.4 沿道土地利用ゾーン

合併以前の各地域の中心地である地域生活文化拠点に近接する国道 10 号と主要地方道椎田勝山線の沿道は、「沿道土地利用ゾーン」に位置づけ、沿道サービス施設等の計画的な立地誘導を図ります。

### 2.2.5 環境共生ゾーン

城井川と岩丸川に挟まれた区域は、2つの河川とともに、森林と海を繋いでおり、本町の中央部に位置する環境帯としての役割が期待されます。したがって、「環境共生ゾーン」と位置づけ、河川などと一体的に自然環境の向上と環境共生の取組みを図っていきます。

### 2.2.6 環境活用ゾーン

基地周辺部は、将来的な社会経済情勢等に柔軟に対応し、観光・交流などの機能を展開していくための候補地として活用を検討します。

「環境活用ゾーン」は、積極的な土地利用は見送り、将来の柔軟な土地利用の展開に備えて、現在の環境を維持・保全していくものとします。

### 2.2.7 森林ゾーン

町南部の山間部は、自然環境と歴史的資産の保全・活用を積極的に図る「森林ゾーン」として位置づけます。

「森林ゾーン」は、現在の豊かな自然・歴史資源の保全・活用を図るほか、既存施設等の効果的活用を図ることにより、新しい産業創出や観光の振興を目指します。

また、森林は産業資源としても重要であり、林道整備等の林業基盤の充実を図ります。

### 3. 都市軸および都市拠点配置

#### 3.1 都市軸配置

「うみ・まち・さと・やま」を結び、本町の魅力を創出する都市軸を設定します。

広域交通軸...広域圏との東西の繋がりを強化します。

産業交流軸...ICと街なかを結び、産業創出を促進します。

街なか環状軸...椎田駅周辺と築城駅周辺を環状に結び、「まち」の一体性を高めます。

生活軸...「うみ」、「さと」、「やま」と「まち」を結び、生活の利便性を高め、交流を促進します。

##### 3.1.1 広域交通軸

国道10号および東九州自動車道およびJR日豊本線を「広域交通軸」に位置づけ、広域圏の繋がりを強化します。

東九州自動車道の整備を促進し、高速交通体系の確立による広域交通ネットワークの充実を本町の発展に活用できるようにしていきます。また、JR築城駅およびJR椎田駅のアクセシビリティ・利便性を高めます。

##### 3.1.2 産業交流軸

築城IC・椎田ICと街なかおよび国道10号を結び、高速交通体系を町内の交通網を直結する「産業交流軸」を設定します。

「産業交流軸」は、ICを活用した新産業の立地を誘導し、既存産業を活性化させる骨格軸と位置づけ、沿道土地利用の誘導を図ります。

##### 3.1.3 街なか環状軸

国道10号、主要地方道椎田勝山線、県道黒平椎田線および県道寒田下別府線(産業交流軸)を椎田駅周辺と築城駅周辺の一体性を高める主要生活道路と位置づけ、「街なか環状軸」を設定します。

「街なか交流軸」は、椎田駅周辺・築城駅周辺の中心地のほか、町内の主要な公共公益施設等を結び、町全域から街なかへのアクセス利便性を高める主要道路として交通利便性・安全性の向上を関係機関との連携を図りながら取り組みます。

また、「街なか交流軸」の内側で将来的な市街地形成を誘導し、コンパクトで利便性の高い市街地を形成します。

##### 3.1.4 生活軸

市街地と山間部を結ぶ県道等を中心とした主要道路を「生活軸」に設定し、町内全域から中心地へのアクセシビリティの向上を図ります。

## 3.2 都市拠点配置

「うみ・まち・さと・やま」の魅力を高める拠点を形成します。

「うみ」…臨海部の交流・レクリエーション拠点

「まち」…地域生活文化拠点、産業・文化交流拠点

「さと」…産業拠点

「やま」…山間部の交流・レクリエーション拠点

### 3.2.1 臨海部の交流・レクリエーション拠点

サン・スポーツランド浜の宮、しいだアグリパーク、綱敷天満宮および各種運動施設などが立地している臨海部は、豊かな自然環境・自然景観を活かしながら、多目的の交流・スポーツ・レクリエーションに対応できる場所として、現在の機能の維持・向上を図ります。

### 3.2.2 地域生活文化拠点

合併以前の各地域の中心地として住民サービスを担ってきた椎田駅周辺・築城駅周辺は、町民の生活の中心であり、文化活動や町内外との交流の拠点地区と位置づけ、既存施設等を活かした生活サービス・文化交流機能の向上を図ります。

特に、椎田駅周辺は本町の「中心核」に位置づけ、町全体を対象とした機能の充実・集積を優先的に図ります。築城駅周辺は、「地域中心核」と位置づけ、「中心核」と連携して、地域住民の生活サービスの向上を図ります。

また、両駅周辺ともに、駅の利便性向上や居住環境の向上を積極的に図り、便利で安全に住み良い、賑わいのある中心地を形成します。

### 3.2.3 産業拠点

東九州自動車道の築城IC・椎田IC周辺は、高速交通体系の効果を活用し、本町の将来的な発展に繋げていくための新しい産業の立地を誘導していきます。厳しい社会経済情勢が続く中で、工業・流通のほか、観光や医療・福祉および教育など様々な分野での土地利用展開に対応していきます。

八津田漁港についても、本町漁業振興の中核漁港として位置づけ強化を図ります。

### 3.2.4 山間部の交流・レクリエーション拠点

求菩提山やキャンプ場、森林とのふれあい施設「ピラ・パラディ」および城井ノ上城址などが豊かな自然の中に点在している山間部は、町内外の人々が自然環境や伝統文化などとふれあい、交流する場所として、現在の機能の維持・向上を図ります。

### 3.2.5 産業・文化交流拠点

観光物産施設である「メタセの杜」は、年間40万人以上が利用しており、今後も魅力を高めるとともに、「うみ」「さと」「やま」の魅力アピールする場として、積極的に活用していきます。特に、「漁港の朝市」や「まこちの里」との連携を深め、農林漁業の振興と一体になった物産機能のより一層の強化を図るほか、伝統文化の紹介・体験や町内の観光資源や各種施設等のアピールを実施する場所として活用します。

4. 将来都市構造図

